

主のさしずを求めて

「ヨシュア記」9章1～15節を朗読。

14,15節「そこでイスラエルの人々は彼らの食料品を共に食べ、主のさしずを求めようとはしなかった。そしてヨシュアは彼らと和を講じ、契約を結んで、彼らを生かしておいた。会衆の長たちは彼らに誓いを立てた」。

イスラエルの民が、ヨルダン川を渡って、カナンの地に入ってからです。エジプトでの奴隷の生活を終え、神様のあわれみによって、約束の地カナンを目指して旅立ってきました。それは荒野の旅路でした。四十年という長きにわたって旅を続け、神様の許しを与えられ、やがてヨルダン川をわたって、カナンの地へ入ろうという時です。神様はヨシュアに様々な事をお命じになりましたが、何よりも神様の言葉を信じ、神様のみこころを行うこと、これが彼らに求められることであったのです。ですから、ヨルダン川を渡り、最初に直面した困難はエリコという堅固な町を討ち取ってくることです。この時、ヨシュアはいったいどうやって攻略しようかと悩みます。一人静かに、エリコの町を遠くから眺めている時、一人の人がやってきた。剣を抜いて向かってくる。びっくりしました。ヨシュアは「敵か、味方か」と彼に問います。その時、「わたしは万軍の主の軍の将軍として今ここに来た」。言うならば、神様の軍の司令官として今来た。それを聞いた時、ヨシュアは勇気百倍、これで大変な力が与えられるぞと。そして「しもべに何をさしずなさいますか」。ヨシュアは神

様の作戦を聞きたいと思った。ところが、その軍勢の将が言うには、「あなたの足のくつをぬぎなさい。あなたが立っているところは聖なる地だからである」。何の事はない。足からくつを脱げと言うのです。それでどうやって勝てるだろうか。敵は強い軍隊があり、また難攻不落の城壁に囲まれているエリコの町です。これをどうやって攻略するか。その時言われたのが、足からくつを脱げと。言うならば、当時の習慣として、しもべになるということです。あなたの思いのままに従っていきますということです。くつを脱ぐのは奴隷の生涯でもあります。その当時、奴隷はくつを履くことがない。くつと言っても、サンダルのようなものだろうと思いますが、それは許されなかった。神様はヨシュアの決断、心の思いを整えて、誰が主でいらっしゃるか、誰がこのことを始めなされたのか、また誰がそれを完成なさるのかを、教えようとされたのです。ですから、まず「あなたの足のくつを脱ぎなさい」。奴隷になります。くつを脱いで仕える者、しもべとなるわけですから、主人の言う通りに、一分一厘違わず、それを行うことが使命です。そこには自分の思いを挟むことはできません。「だって、こうだろうに。だったら、こうした方がいいのではないか」と。ついそう考えます。夫婦であってもそうです。相手が言うことをまるまると、無条件に受け入れ従うことはなかなかできない。まさにイエス様がおっしゃるように、死ななければならぬ。自分の古いもの、肉なるものに死ななければ、神様の求めるところに従うことは決してできません。

だから、軍勢の将はヨシュアに「あなたの足のくつを脱ぎなさい」と言われたのです。つべこべ言わない。ただ黙って、一つ返事で、「はい」と従っていく。これは私たちの信仰の力でもあります。

今もイエス様は私たちの心に細き声をもって語りかけて下さる。「これは道なり、これに歩め」、「そこはだめだよ、危険があるよ」と。でもつい肉の思いのほうが先立って、イエス様の御声を聞きながら、そうは思いつつも、やっぱりこうだ、こっちの方がいいに違いない。自分の肉の働くところに従って、事を進めていく。その結果、必ず失敗するのです。初めはうまく行ったように思います。しかし、その後、むしろもっと大きな問題にぶつかってしまいます。だから、常に主に従うことが最も大切な事です。今日も、こうやって私たちは生かされ、この世に命が与えられています。それは私たちの好きな事をするためではなく、またしたい事をするのではなくて、主のみこころを行うためです。イエス様が私たちのうちに宿って下さるのは、今賛美しましたように、主が私たちと共にいて、私たちを慰め、励まし、力を与え、望みを与えて、ご自身のみこころにかなう者へと私たちを造り変えて下さるからです。

ヨシュアの場合もそうです。彼は大勇士モーセの後を受けて、気持ち的には高揚していたでしょう。これからは自分が頑張らなければならない。イスラエルの民をモーセが率いてきたように、彼としても力が入っていた。それだけに負ける

わけにはいかない。ところが、そこでもう一度、「足のくつを脱ぎなさい」。「わたしは神の軍勢の将として、今来たのだ」。「しもべになれ」と命じられたのです。そこでヨシュアはくつを脱ぎ、「主よ、あなたは何をお語りくださいますか」。求めた時、驚くことを言われます。エリコの周りを聖歌隊が、また祭司たちが契約の箱をかついで、一日一回、回れ。七日目には七回回って、大歓声をあげよ。ラッパを吹き鳴らせ。そうしたら、勝利する。まことに、考えれば、ばかばかしい。そんなことで勝てるわけがないと思います。しかし、彼は言われたように、ばかなように、忠実に尽くすのです。従います。そうしたところ、七日目の朝、大歓声と共に、エリコの町の堅固な城が崩れていきます。神様は驚くべき事をそこで見せて下さる。まさに彼らは無手勝流、武器らしい武器は何も持たなかったと思います。四十年も放浪してきましたから、何も武器もなく、空手でぶつかっていった。そこに神様の力が働いた。今でもそうです。私たちが肉の力で何かしようとする時、神様は手を引かれます。「やれるなら、やってみなさい」と言われるに違いない。できないのですから、「主よ、どうしましょうか」。今、目の前におかれた一つの事、自分にとっては嫌な事だけれども、これは主が求め給う事ならば、目の前の今の状態をよしとして、神様のものとして、感謝して受ける。これが私たちの勝利の秘訣です。そうする時、神様は私たちの思いを越えて、願いを越える、想像のつかない不思議をもって、答えて下さるのです。主に常に心に向けていくことです。

その後、エリコを攻略した彼らは、次なる所へ出掛けて行きます。そしてアイの村を攻略する時、大失敗をするのです。相手が小さな村で、戦う人もあまりいない。簡単、簡単、こんな踏んづけてしまえば、一瞬にして消えてしまう。こんなやつつけてしまえ。そして、行ってみたら、大反撃を食らって、敗走する。その時、ヨシュアは文句を言う。「どうしてこんなことになったのですか。あなたが私たちと共にいながら、なぜこんな負け戦をすることになったのか」。その時、神様は「あなたの内にある汚れたものを取り除きなさい」。彼は何の事かよくわかりません。神様の前に祈り、指示を求めていきました時に、一人の人が本来してはならない事をしてしまった。エリコの町を攻略した時に、「何一つ残さず全滅させる。すべてを滅ぼし尽くせ」、これが命令でした。ところが、一人の人がエリコの戦いの後、高価な金の延べ棒か何か知りませんが、こっそりくすねて、自分の天幕に隠していた。それは神様のみこころにかなわない。そのために、神様は彼らに力を現わされなかった。そして、彼らの原因を探っていく時に、一人が罪を犯した結果であった。神様の言葉に従わなかったからだ、その人は石打の刑で殺されてしまいます。厳しいです。その後、もう一度、アイの村を攻めた時、神様は力を現し、一気にその村を攻略してしまいます。

イスラエルの戦いぶりを、周囲の国、群雄割拠している豪族たちが見聞きする

のです。これは大変な事になった。武器も何も持たない彼らが、あのエリコの町を滅ぼし、またアイの村をつぶして、どんどん攻めこんでくる。そうなったために、今読みました9章の1節に、「ヨルダンの西側の、山地、平地、およびレバノンまでの大海の沿岸に住むもろもろの王たち、すなわちヘテびと、アモリびと、カナンびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとの王たちは、これを聞いて、心を合わせ、相集まって、ヨシュアおよびイスラエルと戦おうとした」。彼らは一人で戦えない。仲間を集めようと言って、ヨルダンの西側の王たちを集めて、そして戦おうとした。その中の一つですが、3節に「しかし、ギベオンの住民たちは、ヨシュアがエリコとアイにおこなったことを聞いて、自分たちも策略をめぐらし」と。ギベオンの民は、イスラエルの民が神様の力によって、破竹の勢いですべてのものを踏みつけていく。蹂躪していく姿を見て、これはたまらない、やられるに違いないと思ったのです。それで策略を練りました。これは何とも賢い策略です。4節以下にありますように、食糧を準備し、古びた袋と、古びて破れたのを繕ったぶどう酒の皮袋、さらに繕った古ぐつをはき、古びた着物を身につけ、かわいたパンを持った。まるでるか遠くの町からやってきた者のごとく装ったのです。そして、イスラエルの陣営のある所にやって来て、ヨシュアに面会するのです。何と言ったか。6節に「彼とイスラエルの人々に言った、『われわれは遠い国からまいりました。それで今われわれと契約を結んでください』」。彼らは、自分た

ちは遠い国から来て、あなたがたに何の迷惑をかけるわけではない。ところが、あなたがたには神様がついていて、大変強い人たちである。それで、どうか契約を結んでください。言うならば、和平条約を結んでほしいと。自分たちの民を滅ぼさないと約束をして下さいと言うのです。その時、初めは疑うのです。「いや、そうは言うけれども、この連中はすぐ近くに住んでいるのではないか。カナンの地の仲間ではないか。どうも怪しい」と。その時、思ったのです。でも、残念なことに、もう一つ踏み込んで、主に問うことをしない。14 節に、「主のさしずを求めようとしない」。不安はあったのです。ひょっとしたら、この近くの間人かもしれない。だから、ヨシュアは 8 節に『われわれはあなたのしもべです』。ヨシュアは彼に言った、『あなたがたはだれですか。どこからきたのですか』。彼らはヨシュアに言った、『しもべどもはあなたの神、主の名のゆえに、ひじょうに遠い国からまいりました。われわれは主の名声、および主がエジプトで行われたすべての事を聞き、また主がヨルダンの向こう側にいたアモリびとのふたりの王、すなわちヘシボンの王シホン、およびアシタロテにおったバシヤンの王オグに行われたすべての事を聞いたからです』。9 節に、「しもべどもはあなたの神、主の名のゆえに」、これは言い換えると、あなたの神様が力強いお方であることを聞いたから、しかも、エジプトで行われたこれまでの出来事、ヨルダンの向こうにいたアモリびと、ヘシボンの王シホン、およびバシヤンの王オグにイスラエルの人々がしたこと、

それを全部聞いてきた。だから、私どもはあなたの所まで訪ねて来たのだと。しかも、ひじょうに遠い国から来ましたと言うのです。今だったら、すぐにわかります。しかし、この頃は何もわかりません。言われるだけです。「遠い所から来ました」。「何という所から?」「いや、あなたがたが聞いてもわからないくらい遠いのですよ」。12 節に「ここにあるこのパンは、あなたがたの所に来るため、われわれが出立する日に、おのおの家から、まだあたたかなのを旅の食料として準備したのですが、今はもうかわいて砕けています」。「パンを見て下さい」。彼らは持っているパンを出す。カチンカチン、ボロボロと崩れかかる。「このパンも私たちが国を出る時、旅のために焼き立てを持ってきました。まだその時、ホカホカの温かいのを持ってきた。ところが、見てごらん下さい。これだけ日数が経って、固くなってしまった。そういう遠い所です」。そればかりか、13 節「またぶどう酒を満たした皮袋も、新しかったのですが、破れました」。繕った、古びたぶどう酒の皮袋を用意していたのですから、当然ですが、これも出発する時には、まっさらな、新しい革袋であったと。ところが、旅の途中で、古びてしまって、こんな風に破れて、破れたのを繕っております。そればかりか、この着物も、くつも、古びてしまいましたと言う。そういう話を聞くと、「なるほど、そうか。このくつもボロボロ。こんなになるなら、一月や二月とは言うまい。もっと遠いだろうと、いろいろな事を考えます。14 節に「そこでイスラエルの人々は彼らの食料品を共

に**食べ**」、イスラエルの民は、言われるままに固くなったパンを食べるのです。くつも調べてみる。古びてしまって、もう履けないような状態。見れば見るほど、彼らが長い月日をかけてやってきたように見える。これはだいぶ年が経っている。着物も古びている。つぎはぎだらけになって。それで彼らの言う通り、遠い国の人に違いない。イスラエルとは無関係の民であろうから、ここは、彼らの求めるように、平和条約を結ぼう。そういう事になったのです。

その時、14節に「**主のさしずを求めようとはしなかった**」とあります。これが致命傷です。たったこの一つの事です。彼らは自分たちの見たところ、体験したところ、自分の理解したところで判断したのです。これは大きな失敗です。今でもそれは確かです。私たちが何か決断する時、あの条件を考え、この事を考え、あの人の意見を聞き、この体験談を聞き、いろいろな事をしらべて、これが良いだろうと決める。先日も、一人の方が自分の健康で問題があった。さあ、どういう治療をするか。いろいろな事を調べる。あれもある、これもある、最先端の医療技術もある。彼は悩み悩んで、また別のお医者さんに聞く。セカンドオピニオン、サードオピニオン、何度となく、いろいろな人に聞いて、どうしたらいいだろうか。悩む。先日も、「先生、今度はどうしたらよいか、迷っています。どういう治療、まあ、いくつかあるのですが、どれが自分にとって、一番良いことなのか。わからない」。どうしたらこの難を逃れる

ことができるだろうか。できるだけ軽く済ませたいと思います。それでいろいろな情報を集めます。今、インターネットで調べたら、いくらでも出てきます。まさに14節「**イスラエルの人々は彼らの食料品を共に食べ**」、見ただけではなく、共に食べるのです。これ程確かな事はない。自分が食べてみて、なるほど、これは時間が経っている。消費期限は過ぎている。ぶどう酒を飲んでみても、もうぶどう酒は酸っぱくなっているという状況を見れば、これは彼らの言う通りだなと思う。私たちはそのような食料品を食べているわけではないですが、別の意味で、いろいろな周囲の情報を求める。収集する。そして何かの判断をしようとする。確かに、そのことも役に立たないとは言えないかもしれない。しかし、まずは白紙になって、「主よ、私はどうすべきでしょうか」と、主のさしずを求めること。これがイスラエルの民の最も大切なこと。私たちの神の民、神の子としての必須要件です。それをしないのであれば、何のための救いかわからない。彼らは主のさしずを求めず、どうしたか。15節、「**ヨシュアは彼らと和を講じ、契約を結んで、彼らを生かしておいた。会衆の長たちは彼らに誓いを立てた**」。会衆の長たち、部族の指導者たちも集まって、それを承認したのです。ヨシュアはお前たちを滅ぼすことはしないと契約を結んだのです。ところが、その後、16節、「**契約を結んで三日の後に、彼らはその人々が近くの人々で、自分たちのうちに住んでいるということを聞いた**」。とんでもない話です。これは困った。三日ほど道を行った所に

住んでいる民であった。本来、滅ぼさなければならぬ相手です。なのに、手遅れ。もう遅いのです。すでに契約を結んでしまった。しかも、神様の前に契約をしたのですから、取り消すわけにはいかない。とうとうギベオンの民は、イスラエルの民と共にあって、奴隷の生涯を送ることになります。それは常にイスラエルの内にあるとげのようなものです。イスラエルにとって、この失敗はずっと残ります。ギベオンの民がイスラエルの中にとどまっていることで、なぜ彼らがここにいるのか。なぜ贖われた民であるイスラエルの民の中に、ギベオンの民が住んでいるのか。そのことを思う度ごとに、先祖の失敗、かつての自分たちの過ちを思い出して痛みを覚える。ある意味では恵みの石塚です。そうでないと、私たちはすぐに忘れてしまいます。たとえ、失敗することがあっても、決して神様はそれを無駄にはしない。ですから、私たちも気がつかないうちに、祈ることを忘れ、人の言葉に従い、自分の思いに従い、突っ走って失敗することがあれば、どこで失敗したのか、しっかりと確認しておきたい。もう二度と失敗を繰り返さないための石塚です。この時のイスラエルの民にとっても、そうです。「食料品を共に食べ」、ここがよくない。一緒に食べて、自分の判断を優先させる。これが失敗です。一方、主のさしずを求める。これが命です。何をするにしても、「主よ、この事をさせていただけますが、力を与えて下さい。もし違うならば、とどめて下さい」。だから、祈ってする時、どんな事でも思い通りに行くとは限りません。神様は時

に応じて、それをストップさせられます。あるいは、自分が嫌だと思うところへ神様が進めと押し出して下さる時、初めは厄介な事になった、逃げ出したいと思うような事柄でも、主がそうおっしゃるならばと、己に死んで従う。そうする時、神様の不思議なわざが、具体的な結果が出てくるのです。

どうぞ、今一度、私たちは何に問いかけ、何に従おうとしているのか。常にはっきりとさせておきたいと思います。ダビデは事あるごとに、主に問います。主のみこころはいかにと。そして、神様はちゃんとそれに答えて、祝福して下さいます。私たちも今、判断を求められます。どうすべきか。いろいろな見える状態に心を向けると失敗しますから、主の御声のみを聞こうと、心を静めて、主に問いかけていきたいと思います。

ご一緒にお祈りを致しましょう。